



TITLE:

〈追憶文〉 飯野春樹先生が残されたもの

AUTHOR(S):

庭本, 佳和

CITATION:

庭本, 佳和. 〈追憶文〉 飯野春樹先生が残されたもの. 経済論叢 1996, 157(2): 80-84

ISSUE DATE:

1996-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/45047>

RIGHT:

經濟論叢

第157卷 第2号

哀 辞

故 飯野春樹元教授遺影および略歴

固有価値と人間ネットワークの形成……………池 上 惇 1

組織環境の特性とその意味付けの連鎖……………崔 俊 24

アダム・スミス芸術論と18世紀民衆娯楽……………後 藤 和 子 48

費用効果分析による医療資源配分について……………土 屋 有 紀 64

追 憶 文

飯野春樹先生が残されたもの……………庭 本 佳 和 80

飯野春樹先生を悼む……………田 尾 雅 夫 85

平成8年2月

京都大學經濟學會

〈追憶文〉

飯野春樹先生が残されたもの

庭 本 佳 和

1995年7月18日（火）は、私たち飯野門下生には忘れられぬ日となった。10時過ぎに帰宅した私に、「飯野先生が亡くなられたのよ」と告げた妻の暗い表情が今も浮かぶ。その時、「まさか」という思いと、「しまった」という気持ちがない混ぜになって噴き上がってきた。8時45分頃に、ご子息（正幸氏）から連絡が入ったのだという。「どうして（帰宅）途中からでも電話してこなかったの」となじるように言う妻に、後悔の念を抱きつつも、「そんなことではない」と胸のなかで思わず呟いた。

その日、飯野研究室の藤井、岩田と流通科学大学の研究室で、ウィリアムソン編『組織理論——バーナードから現代および未来へ——』の翻訳検討を行っていた。監訳者の飯野先生が残り1章を私たちに託して入院されたからである。ここ10年ばかり、夏、冬、春といった休暇ごとの検査入院、療養入院、（私たちは静養入院と呼んでいた）を常とされていたとはいえ、この度の入院は些か気にはなっていた。冬から春にかけての入院がいつもに比べると長かったのと、学期途中で「疲れた」と不調を訴えられる電話を頂いたからである。「後は何とかしますから、大学の方は直ぐ休講して、静養してください」とお話ししたものの、いつもとは少し違うものを感じていた。それでも、翻訳検討会の後、三宮で飲みながら「飯野先生の退院祝いを兼ねて、近くでどこかに行こう」と相談したのは、6月の終わりに、電話で飯野先生ご自身が「7月末には退院し、翻訳にも目を通したい」と元気そうに話されていたこともある。先生の入退院に、私たちが慣れてしまったこともあろう。また、先生の病状を小さく見せるために、周囲に「検査入院」とか「静養入院」と説明していたことも、わが身に響いたのかもしれない。心のどこかで漠とした不安を覚えていても、少なくとも私は、先生が必ず元気な姿で退院されると信じていた。「病室の直通電話でいつでも話ができるから、見舞いに来んでいい」と言われてはいたが、油断であった。それだけに、訃報の衝撃は大きかった。7月20日の告別式は、私たちの気持ちを見透かすかのような激しい雨であった。

思えば、入学した関西大学の『商学論集』（第10巻第3・4・5号，1965年）「組織論的

管理論の一体系」で、飯野先生のお名前を拝見してから30年。「経営管理論」の講義で、驚咳に接して28年。親しくご指導を受けるようになってからでも20年が過ぎた。その間に私たちが受けた影響と濃密な時間の共有を、単に「学恩」という言葉では表現し切れない。私には今でも飯野先生を冷静に振り返ることが難しい。

「飯野といえば、バーナード。バーナードといえば、飯野」と誰もが納得するほど、飯野先生のバーナード理論研究は深かった。善し悪しは別にして、それは「経営管理論」の講義にも反映し、かつて私が次のように書くほど徹底していた。「学生時代、クラブ活動にうつつを抜き、その卒業生だと実感する私が、珍しくも出席した講義はバーナード一色といってもよいほど強烈だった。それにひかれて、聴き続けたら、他学部での盗聴も含めて出席し続けた講義、4年間でわずかに5つのうち1つになった。それが私とバーナードとの、もっと言えば、強烈なバーナーディアンとの最初の出会いである」(『バーナード』文眞堂、1986)。学内で飯野先生を目にした学生は、「バーナードが歩いている」と囁いたものである。既にバーナード研究家として著名であったが、本格的に名をされたのは、アメリカ留学(1971-72)以降であろう。持ち帰られた資料を基に執筆された研究には意味さえあった。その資料を自宅の火事で焼失される不幸にもめげずにまとめられたのが『バーナード研究』(文眞堂、1978年)にはかならない。索引作成を手伝った私にも思い出深いこの一冊は、内外バーナード研究の頂点をきわめ、20年近くを経た現在でも、越えることが難しいバーナード研究の基本文献である。なかでも、飯野先生が定式化された「責任優先思考(責任中心思考)」の主張は光っている。

この『バーナード研究』の普及版とでもいうべき企画が有斐閣から持ち込まれ、飯野春樹編著『バーナード 経営者の役割』(有斐閣新書)として出版されたのが、翌79年である。飯野先生が植村省三先生に執筆を依頼された阪急長岡天神駅前の喫茶店に私もお供した。その他の執筆者は、「中堅・若手がいいだろう」ということで、その場で、高澤十四久(現専修大学教授)さんと吉原正彦(現青森公立大学教授)さんに決定し、それに私も加えられた。この新書は、1995年現在で15版を重ね、経営学としては息の長い書物となっている。しかし、印象深いのは「天喜」で開かれた内輪の出版祝賀会である。編者の飯野先生が執筆者へのお礼にと世話をされ、身銭を切られた。話はまったくあべこべである。植村先生はともかく、チャンスを与えられたのは私たちであり、方法も枠組みも借用した上に、何度も何度も指導を受け、書き直し、お宅で奥様の手料理まで御馳走になって、やっと出来上がった本である。私であればついつい恩きせがましい

言動が出るであろうに、逆に相手を労り、お礼と称して、いつの間にかその気にさせるのはゆうゆうたる余裕というものか。飯野先生のお人柄であろうが、学ぶべき身の処し方であった。

バーナード研究といえば、バーナード誕生100周年記念事業も忘れられない。飯野先生が関大から移られて間もない京大で、内外のバーナード研究者を集めて記念大会（1986, 11, 7-8）が盛人に催された（飯野春樹編『人間協働』文眞堂〔1988〕に収録）。ウォルフ・飯野の手になるバーナードその人の英文論文集とその翻訳（飯野監訳）、それにノーベル賞（1978）を受賞したサイモンをはじめとする17人の論文集『バーナード——現代社会と組織問題』からなる3冊1組の記念出版も同時に刊行された。この頃、研究者としての飯野先生は至福の日々だったに違いない。私も翻訳と論文集に計画段階から参加させて頂いた。当時、私は病弱だった飯野先生に代わって京都学園大学の非常勤をしていた。講義を終えて乗った保津川沿いを走る旧山陰線からの車窓が真っ赤に染まった秋のある日、二条駅に飯野先生は待っておられた。旧京都ホテルの眺めのよいレストランで、「考えろ」と言われていた論文集の構想と各章に複数の執筆候補者（あくまで下作業で選定はしていない）を示しながら説明したのが、昨日のように思い出される。「仙台まで行ってくれるか」と言われて飯野先生のお供をした東北大学の加藤勝康先生の研究室では、バーナード研究の両巨頭が真剣に議論し、研究以外の一切を考慮せず人選するのをかいま見て、「これこそ、研究者」と頭がさがった。もちろん、食通の飯野先生は、仙台の牡蠣と魚を見逃すはずはない。毎晩食べ歩き、そして歴史を訪ねて平泉まで足を伸ばした。

この時に限らず、「御神酒どっくりみたいだ」とご自分で苦笑いしながら、二人ワンセットで北海道、九州へと研究会に出かけ、土地の美味しいものをよく食べ歩いたものである。東京からの帰路、浜松あたりで「スッポンでも食べようか」と途中下車されるようなこともあった。後には、飯野研究室の若い仲間もこれに加わって賑やかになったが、そのようなとき、飯野先生は本当に嬉しそうであった。もっとも、飯野先生は27年勤められた関大でなかなか大学院を担当されなかったこともあって、私のように押しかけて研究室に居すわった人間を別にすれば、私の上にも下にも優秀な学生が多かった割には、研究者になった教え子は少ない。松尾陽好（佐賀大学助教授）、藤井一弘（甲子園大学助教授）、岩田浩（大阪産業大学助教授）に私。これに関大の飯野研究室に既に参加していた西岡健夫（追手門学院大学助教授）を加えても五人である。京大での8年

間でも、経営学が主流になれない経済学部ということもあって、大学院で指導した田中求之（福井県立大学助手）と磯村和人（福島大学助教授）の2人に過ぎない。飯野研究会には、それ以外に院生時代から阿辻茂夫（関西大学助教授）も参加していた。そして、この数少ない教え子たちも、自由放任ともいえる飯野先生の下だからこそ、育ち育てられたともいえる。自由な議論とどんな辛辣な批判も許された。その矛先には、飯野先生の研究も当然に含まれている。「飯野研究室は放し飼いだ」「柵も杭もないぞ」「食べる草はあるのか」といった調子で研究会が始まるが、それでも飯野先生あつての研究会であることを全員が自覚していた。その飯野先生が亡くなられた今、私たちはたとえようもなく寂しい。

飯野先生の趣味に写真撮影がある。この写真の腕は、『京人の時計台』（1994）でも遺憾なく発揮されているが、この趣味が辛く生かされたのが、昭和56年（1981）10月に亡くされた奥様を偲ぶ『菊一輪』（1983）であった。私と大学時代に私が所属していたクラブの後輩・阪上君（東洋紙業）とがお手伝いしたが、残された絵と書に、先生の撮られた写真で構成されている。完成したサイン入りの『菊一輪』に、「美子の死後直後から今日に至まで多大のご支援、ご激励をいただき有難うございました」と私と家内宛の自筆の礼状を添えて、箕面の自宅までわざわざ持参して下さった。ここにも、そのお人柄がよく現れている。

確かに、飯野先生は誰もが認める「気配りの人」であった。亡くなられる20日前に、植村省三先生の葬儀をお知らせしたときも、ご自分のことを欄にあげて、「忙しいいつでも体を壊したら何にもならない。あんたも気をつけや」、「こんな暑いのに見舞いなんて来んでええ」と気ばかり使っておられた。しかし、飯野先生の本領は「寸鉄人を刺す」毒舌にあったことを、門下生以外はあまりご存知ないだろう。飯野先生が、どのような人を敬愛し、どのような人を評価しているのかを、遠回しの京都弁の中から探り、私たち門下生は「研究とは何か」「何が大切か」を学んだような気がする。

亡くなられる数年前から、京大以外の学会に出席されることのなくなった飯野先生が、半日とはいえ、私が報告した滋賀大学での経営学史学会（1994、5、22）に足を運んでくださった。吉田和夫先生が「よく来た。よく来た。」と大喜びされていたのが、目に浮かぶ。飯野先生の最後の本格的な学会出席はその1ヶ月後の組織学会（1994、6、25-26）である。私が「今度の組織学会は加藤先生が学長をなさっている青森公立大学ですよ。藤井も報告しますし、行きましょう」と誘った。ローカル色あふれる青森公立

大学での懇談会で、楽しそうに歓談される飯野先生。学会終了後に岩田、田中をまじえてドライブした十和田湖と奥入瀬溪流で、「しまった。一眼レフを持ってくるんだっ
た。」と悔しそうにコンパクトカメラを覗き、「こんなに綺麗ななら、また来たいな」と
いっておられた飯野先生。その時の写真を前にすると、あの独特の口調で「もしもし、
飯野ですが」と、今にも電話がかかってくるような気がして、素直に合掌する気になら
ないのである。